

研究報告

A市における乳児を持つ母親が求める子育て支援への思い

笹木葉子* 永谷智恵 塚本陽子 加藤千恵子

名寄市立大学保健福祉学部看護学科

keywords：子育て支援 母親の思い 乳児の親

1. はじめに

5歳までの子どもを持つ母親が、子どもと二人きりで過ごす時間についての調査によると、4割以上が12時間以上、そのうち3割は16時間以上に及んでいる。また大半の母親が、子どもと二人きりで過ごす時間をどう過ごせばいいのか困り、時間をもて余すことがあると答えている¹⁾。このように現代の母親達は、閉塞した育児期を過ごし、子育てのしにくい状況に置かれている²⁾。A市の子育て支援の状況を見ると、平成25年18歳未満のいる一般世帯の世帯類型は、全国と比較して核家族世帯とひとり親世帯が多く、全体の85.3%が祖父母からの支援が受けられない状況で育児している。日常的には7割、緊急時についても約3割に頼る人がいないなど多くが孤立した子育てをしている³⁾。特に、地元出身でない初産の母親は、周囲にほとんど知り合いがおらず、親子の集いや交流の場に出向行くことが難しいなど、孤立化の率が高いと推測される。孤立した環境での子育ては、産後うつや育児不安のリスクが高く⁴⁾、育児不安予防のために、子育て親子が気軽に集い、交流することができる場の提供や、子育てに関する相談・援助等の促進など子育て支援が求められている⁵⁾。そこで、A市の乳児を持つ母親が求めている子育て支援について聴き取り調査をし、求める育児支援についてまとめたので、ここに報告する。

2. 研究目的

乳児を持つ母親へのインタビュー調査により、日常生活における母親達の求める具体的な子育て支援や支援の思いを聴きとり、ニーズに合った子育て支援を提供するための示唆を得る。

3. 研究方法

1) 研究デザイン：質的記述的研究

2) 研究協力者

A大学が開設する子育て支援に参加している乳児の母親で、研究の趣旨に同意した母親10名

3) データ収集方法

大学の子育てサロンを利用している乳児を持つ母親にインタビューを依頼し、研究協力者の承諾を得て、半構成的面接を行い、面接内容を録音した。

4) データ収集期間：平成28年11月～平成29年1月

5) 面接内容

① 親子の1日の過ごし方

② 育児に対する思い

③ 要望する子育て支援への思い

6) データ分析方法

*責任著者 E-mail:sasahappa@nayoro.ac.jp

録音したデータから逐語録を作成し、面接内容に沿って、親子の1日の過ごし方、育児に対する思い、要望する子育て支援への思いに焦点を当て、意味のある文節で区切りコード化した。意味内容の類似するものをサブカテゴリーとし、サブカテゴリーを統合して再編しつつカテゴリーを抽出しラベル化した。分析に当たっては、共同研究者間で検討し妥当性の確保に努めた。

4. 倫理的配慮

研究参加者に対し、研究の目的と方法、匿名性の確保、研究途中での参加辞退の自由、インタビュー内容の記録と終了後の破棄、データの施錠できる場所への管理、データ解析はネットワークから独立したPCを使用、研究成果の公表などについて説明し、文書と口頭にて同意を得た。なお、本研究は、名寄市立大学倫理審査(承認番号16-048)を得て行った。

5. 結果

研究の本趣旨を理解し、研究者が行う面接に同意が得られた参加者は10名であった。全員第1子で12か月以内の乳児を持つ母親であった。参加者の年齢は、23歳～39歳、平均31.4歳、調査時の職業は、育児休業中1名、専業主婦9名であった。子どもの月齢は、4ヶ月～11か月、平均7.6ヶ月、性別は女児5名、男児5名であった。面接時間は、19分～45分 平均29.6分であった。

分析の結果、467の意味内容コードを抽出した。抽出された意味内容コードを分類統合した結果、質問項目ごとに、親子の1日の過ごし方は13のサブカテゴリー、1つのカテゴリー、育児に対する思いは、19のサブカテゴリー、7つのカテゴリー、要望する子育て支援への思いは、10のサブカテゴリー、2つのカテゴリーが抽出された。(表1)

面接内容から、乳児の母親が求める子育て支援に対する思いについて、抽象度の高い順に、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーを< >、母親の語りを「 」で示し、不足な言葉を()で補った。

1) 親子の1日の過ごし方

【子どもの成長とともに整う生活リズム】

母親は、子育てが始まってからの日々を、「本音を言っちゃうと自分の時間がなくなった」「泣いてたり、ぐずってたりしていると、9時過ぎに晩御飯を食べることもあります」「睡眠不足から始まり日々追われるように日付も分からない」と<自分のことは後回し>になっていたが、「最近は大いぶ独り遊びができるようになってきた」「子どもが寝たら自分の時間ができる。」「1日1回は外に遊びに行かせる。」など子どもの<成長とともに生活リズムができる>ようになり、「娘が起きるまでにお弁当と朝ご飯を作る」「お買い物行くときはおっぱいあげて少ししたら準備する」など子どもの<成長とともに家事ができる>ようになっていた。

2) 育児に対する思い

【想像を超える育児・家事の大変さ】

多くの母親が、「もうとにかく寝不足です」「なんで泣いてるかわかんない」「寝かしつけが大変」と<バタバタと余裕のない日々>を過ごし、中でも、「要求は泣くだけなのでちょっと大変」「旦那さんも結局余す」「もう何をしてもダメな時があった」「寝つきが悪くてギャン泣きしてた頃が大変」と<ギャン泣きにパスしたいほどの大変さ>があったと、想像を超える育児や家事の大変さを懐かしそうに振り返っていた。

【育児・家事の協力に対する夫と親への感謝】

母親は「育児をいろいろやってくれて助かる」「一番頼りになる人は旦那さんです」「夫と交互に協力する育児」「寝かし付けもできるので助かる」「旦那が帰ってきたらお風呂に入れてもらう」など<育児の協力で

頼りになる夫>のありがたさを述べている。「(育児を) すごいやってもらえる。」「育児は苦手だから休みの日は全部自分がやるって言って」「寝かしつけも練習してできるようになった」と<育児の協力に頑張る夫>の育児の上達を評価していた。

「仕事帰りに買い物してくる」「朝ごはんもお弁当も作り置きを自分で詰めていく」「自分の物は洗濯してアイロンがけて」と<家事の協力も頑張る夫>に感謝し、なくてはならない存在になっていた。

親の協力がある母親は、「夫が長期出張でも、実家にずっと行っていて悩まないでこられた。」「何かあっても預けられる。」「旦那の親でも自分の親のように頼っている」と<親の育児協力で悩みはない>ことに感謝していた。

【気分転換の外出準備に目いっぱい】

母親は「1度ダメと言ってもわからない事は分かっているんです」「また同じことを繰り返すことにキーンとなることがありますね」「離乳食の時間がやっぱり集中しなくなった」など<わかっていても繰り返すイライラ感>を抱え、「だいぶ自由に(外にでられるように) なってきた」「外出できるのが楽しくなってきた」と<気分転換に外に出る>が「(イベントの時間に合わせ) 時間に追われまくって」「行こうと思ったのにおっぱい飲むとかやうんちしたりして思ったように絶対ならない」など気分転換に<出かけるまでが目いっぱい>になっていた。

【相談できない孤立感】

母親は「(子どもに) どんな遊び方がいいのかっていうのがよく分からない」「誰もいなしのお風呂はどうやって入れているのかな」「5か月くらいまで吐いていて原因がわからなかった」と<育児について尽きない心配>があり、「リアルタイムで解決したい」「ネットで不安を煽られたので、対面で相談したい」「(相談したいけれど) 友達が一人もいなかった」「アレルギーを持つ子の親に相談したかった」「友達づくりができなかった」など<相談相手がいない孤立感>の中で育児していた。

【育児に張りが出るママ友の存在】

「外に遊びに行けるようになってやっとママ友ができた」「ママ友は仕事とは違う付き合いがあるのが面白い」「(ママ友ができて) ちょっと育児が楽しくなった」「聞きたいことはすぐママ友に聞いた」「ママ同士の気持ちの交流とか、そんな発散もしたい」「(子どものことは) ママ友にしか言えない」など<思いが通じる仲間づくり>をしていた。「健診で会って仲良くなる」「同じ月令の子どものママが仲良くなれる」「ママ友で年代が違くと疲れる」など<ママ友は近づきやすい同月令、同世代>が気軽に繋がれると感じていた。子育て支援の場については「イベントに参加できる」「コミュニケーションが楽しい」「ほかの子を見て自分の子の成長を確認できる」「周りの人と話すと、少し気持ちが楽になる」「情報交換の場になっているんです」など子育て支援の場で<同感できる思いに頑張る力が出る>と感じていた。「(初めての参加は) 1回目は緊張するけど行ったら一人じゃない感じなので」「こんなのあるよって誘われて、一人じゃなくなる」「1回目で声かけてもらえた」と<誘ってくれて、仲間ができる>ことに喜びを感じていた。

【子どもの成長が育児のよろこび】

母親は、「(子どもの) 笑顔がでてくる分育児が楽しい」「笑顔が出てきて、意思の疎通ができるようになって楽しい」「よくしゃべるので可愛いなって・・・」「寝顔が可愛い」など<成長していくわが子が可愛い>、「(この可愛い) 時期がどんどん終わっていくんだ」「日々成長していく(楽しみ)」等で<子育てが楽しい>と感じていた。

【子育てをとおして成長していく自分】

「育児して、社会と関わり持って成長した」「この子を通して、自分の成長がわかるように感じます」「環境が変わって適応能力がさらに身に付いたかなとは思いますが」「どんどん気持ちに余裕が出てきたのかなって感じます」と<子育てを通し適応力がつく>ことを実感していた。「育児に対して、嫌だなー、面倒だな

一、楽しいな一、苦しいな一とか全部ある」「大変が多いんですけど使命感ですね」「ママ友さんとの付き合いってというのが1番大きい」と子育ては辛さと楽しさの両極の思いがあり「(子どもには) 一人でしっかり生きていけるだけの力を付けてあげなきゃって思うんです」と大変な育児の中でも目標を持っていた。

3) 要望する子育て支援への思い

【実践的育児指導や情報の要望】

「5、6か月でいざ（離乳食を）始めるときに、資料はくれてるけど、実践とか直接話聞いてみたい」「保健センターで1度あるんですけど、それ以降ないんです」「10倍って何って、どんなもの（かわからなかった）」「(初期の) 離乳食講習に出てすごい衝撃的だった」「そんだけ味付けるんだ」「こんなにいっぱい食べてもいいんだ」「耳で聞いてくると目で見るのとはまた違う」などと＜実習できる離乳食指導への希望＞が多く聞かれた。夫の育児について、「夫は協力したいんだと思うんですけど、仕方がわからないんだと思う」「娘の世話をしながら、旦那の育児への対応までは今は手が回らない」「お父さん達にも離乳食の作り方、オムツの替え方、服の着させ方っていうのを、もう一回やって欲しいなと思います」「父親の育児教室あればいいですね」と＜父親の育児学級の開催を希望＞する声が聴かれた。また、「身近に体重計があるといいなって思います」「母乳だと、どのくらい飲んでるかが分からないので」「結構寝返りとかすごい遅かったから、例えばなんか体の動かし方（を教えてほしいかった）」「発達の段階に合わせたアドバイスがあったら」と＜成長を確認し手助けできるアドバイスの希望＞がある。また子育てサークルなどの情報を（産科の）病院とかで知れるといい」「支援センターは知っていたがサークルの事はわかってなかった」「サークルがあるって妊娠中からわかってたらもっとよかったって思います」と＜妊娠中に知りたいサークル情報＞があることが分かった。

【公共施設設備・経済的支援への希望】

職場復帰を考えている母親は、「仕事復帰したときに、結構遅くまで預かってくれる所がたくさんあるといい」「結構そういうところがあるといいな」と＜仕事開始の心配は延長保育の有無＞であった。仕事以外でも「ファミリーサポートってA市にもあるんで、そこに登録するにはちょっとハードル高い」「運転免許の講習の30分だけでも赤ちゃん連れて来ててなんかかわいそうだった」「ハードルの低い、ちょっと預かりますよみたいなのがあったらいいのかな」「民間でも、お金がちょっとかかっても託児をホッと預け入れるところ」「(制度を) 知らないから、助けてもらおうっていう頭がない」「紙面だけじゃなく、気軽に(制度の) 説明が受けられたりとかあるといい」など公的一時預かりは＜ハードルが高いちょっと預けられる場所＞であった。

日常生活の中で、「オムツ台のあるお店って結構限られてたりするんです」「病院とかその、金融機関とか行っても、ちょっと（子どもを）置く場所っていうのがなかったり」「荷物があって、料金出るのがすごく手間取ってしまったり」「スーパーの店員さんは結構優しいので、袋詰めする台まで運んでくださったけど」「どこでおっぱいあげようか（困ることもある）」「ベビーを連れて入れるトイレがない所（施設）もある」「(設備がないので) ベビーとご飯食べるのは結構大変です」と、＜抱っこで移動、身動きが取れない不便さ＞から設備の充実への希望が述べられていた。

子連れでの「母親学級は、車が1台しかないんで、夫婦参加だけ（の回）しか行けなかった」「バスは1時間に1本だから億劫でバス乗る気にもなれない」「バスの時間によって保健センターにも行けなかった」「だっこして（重たいし）バスとかあるわけない」「帰りのこの荷物さえどうにかできれば」と＜移動に手間取る不便さ＞を訴え、子ども連れの移動や買い物荷物のための支援を求めている。また母親から＜子連れで出かけられる場所・イベントの不足＞に対し、「町の中心から離れているので、地区ごとに支援センターがほしい」「子育て支援センターを土日も開催してほしい」「地区の子育て施設は月火木の1時間半しか開いていないのでその時間に寝てたら行けない」「大きくなくていいから子育て施設があったらうれしい」と地域の格差を埋

める要望が聴かれた。

町のイベントについて「赤ちゃん相撲のイベントがよかった」「都会ではハイハイの徒競走とかやってる」「ベビー（のイベント）って、やれることに制限が結構ありますよね。授乳室とか、オムツ替えスペースとか」また、「子ども連れて行ける仕様の喫茶店が少ない」「小上がりとか掘りごたつだと、やっぱりもう逆に危ない」と考えている。

＜育児への経済的支援の希望＞では、「1万5,000円の子ども手当でオムツ買って、離乳食作って、助成が足りないかな」「他市町村みたいにおむつの無料事業があるといい」「出生届出した時に、おむつの袋を何百枚か支給してもらって、めっちゃ助かる」と育児コストに対して経済的支援への希望がある。「子育て支援センターでの（読み聞かせ、クラフトなど）普段は家でやらないことだから、助かる」「年齢（制限）があるかもしれないけど、一応、1時間幾らで預けれるのがあるみたいですね。」「（子育て支援）結構、（公的以外でもいろいろあって）思ったより充実している」と満足している支援についても語られた。

6. 考察

1) 育児に対する思い

親子の1日の過ごし方は、初めの頃は、子どもの機嫌によって左右され、自分のことは後回しにし、自分の時間が無くなったと感じていた。日が経つうちに、だんだん親子の生活リズムができ、家事もできるようになり、【子どもの成長と共に整う生活リズム】を実感する余裕も出てきていた。

育児の始まるの時期は、授乳、寝かしつけ、離乳食、泣くだけの要求に振り回される中で家事をこなし、【想像を超える育児・家事の大変さ】に翻弄されていた。その中で、夫が家事や育児に頑張る姿や、親の支援により悩みがなく育児ができたところに、母親は【育児・家事の協力に対する夫と親への感謝】を感じていた。特に生後2〜3ヶ月の時期の母親は、育児に慣れない中、外出もままならず夫の支援を切に求めており、この時期は夫からの支援が重要となる。また、親からの支援については、経験の蓄積によるおおらかな関わりが母親の安心感に繋がっていることが窺われた。しかし、母親が子連れで外出ができるようになると、育児の頼りは、同じ思いを共有できるママ友にシフトし、育児を楽しい方向へ導くエッセンスとして、【育児に張りが出るママ友の存在】となっていく様子が見える。また、笑ったりすることが日々多くなる我が子に、【子どもの成長が育児のよろこび】となり、【子育てをとおして成長していく自分】も感じていた。育児に対する思いは、周囲で支える人的要素がうまく回ってはいじめて、子どもの成長を楽しみ、育児が楽しい時間になっていく。母親の育児の習得状況によっては、支援する側のキーパソンに対しても、どのような支援が必要かを整理する援助者が必要となる。

2) 乳児の母親が求める子育て支援について

乳児の母親から、【実践的育児指導への要望】では、離乳食開始前の実践できる離乳食講習会の開催があげられていた。母親は、4か月健診で離乳食の資料を配布し簡単な説明を受けているものの、実際に始める5、6か月の頃には、10倍粥の意味や形状、子どもに食べさせられる量などがわからなかった。離乳食中期の実習のある講習会に出て、量の多さや味付けに衝撃を受け、「耳で聞くのと目で見るとでは違う」「離乳食を始める前に実際に見る機会があると、困らなかったのに」と発言している。ソーシャルメディア上の発言分析において、0〜6か月の母親の発言は、離乳食や母乳など栄養に関するものが上位を占めている⁶⁾ように、離乳食は母親にとって初めて見るに等しいものであり、初期の形状の“滑らかにすりつぶした状態”がどのようなもので、いつどのように与えるのか等、未知の領域である。初めて育児を体験する母親にとって、離乳を開始する前に、離乳初期の実践できる離乳食講習会は、乳児期の母親のニーズに合っており、ストレスの軽減につながるものと思われる。

母親は子どもが2~3か月頃から育児も慣れ外出できるようになる。第1子の母親には、母子保健・育児支援として、愛着形成に支障をきたさないことを目的に、妊娠期から出産早期、そしてその後においても丁寧な関わりが重要⁷⁾とされているが、この時期の母親たちは、育児情報がなく孤独な日々を過ごしていた。特に出産後は慣れない子育てに忙しく、外出もままならず、育児情報が得られにくい。その点から母親は、病院や保健センターで、妊娠中に育児サークルや子育て支援やその場所などの情報発信を希望していた。この情報は、母親学級や新生児訪問の機会を利用して、情報を伝えることができる実践可能な支援である。この情報により、母親同士話しができる環境づくりができ、孤立した育児による育児不安予防に貢献できると思われる。ぜひ病院や保健センターからの情報発信を期待したい。

母親は、父親の育児協力を感謝していた。しかし反面「父親が育児の仕方がわからない」「タイミングの悪い関わりにイライラ」しており、「夫への育児への対応まで手が回らない」と育児期の父親の育児教室を求めている。厚生労働省が支援する、男性の子育て参加や育児休業取得促進等を目的とした「イクメンプロジェクト」サイトでは、育児に意欲を持つ父親の実践報告が多く寄せられている⁸⁾。また、ファザーリングスクール⁷⁾も登場し、父親の育児への関心は低くはなく、ニーズも少なからずある事が窺われる。また夫婦で子育てについて話し合う機会にもなり、夫婦でともに育児する意識の向上にも繋がるものと思われる。

育児期の母親の関心は、子どもの成長発達に向けられており、手軽に気軽に立ち寄り子どもの計測ができたりアドバイスがもらえる機会を求めている。特に4か月健診までの間は、母乳量の測定や身体計測とともに、子どもの発達段階に合わせた具体的なアドバイスを求めている。対面で自分の子どもを見てもらって相談したい母親の希望が表れている。

【公共施設設備・経済的支援への希望】では、今後職場復帰を考えている母親は、遅くまで預けられる延長保育の可否が気になり、仕事復帰の心配をしていた。これらは地域の保育園等の情報収集から始めることが必要で、育児支援の情報と合わせて、情報の検索方法を周知できる機会が必要であると思われる。また、仕事でなくても、母の用事でも気軽にちょっと預けられる場所の希望もあった。地域の子育て支援のメニューを見てみると、利用者支援を利用した情報収集、一時預かり(保育園、幼稚園、地域子育て支援拠点)、子育て短期支援、ファミリーサポートセンター、病児保育など多くの支援がある⁸⁾。しかし乳児期の母親は、慌ただしい毎日の中で情報収集するのは難しい。登録することや予約が必要であることは何となくわかっているが、紙面をじっくり読む余裕がない。そこで母親は、健診等の合間に子育て支援情報やファミリーサポートセンターなどの活用方法を聞き、その場で登録ができることを希望している。何度も子どもを連れて出向くことは難しい時期なので、即日登録のシステムは育児期の行動に即した支援であると思われる。

公共施設設備について、子どもを抱っこ紐で固定したまま、公共交通機関で移動したり、病院や金融機関、レストランを利用したりする時、重たく身動きが取れずに辛いという意見が述べられていた。他にも、おむつ交換や授乳のスペースが無いなど施設の構造上の問題への指摘や、交通機関の便数の少なさ、経路の不便さ、さらに冬の移動手段がないなどがあげられていた。これらを解消するには、企業の経営や努力に任されているところがあり、解決には難しい問題ではあるが、市民の声として挙げ続けていくことが必要である。

さらに、子連れで行けるレストランや喫茶店、子連れで参加できるイベントがほとんど無いことも挙げられ、子連れであることで制限が多い生活への不満につながっていた。どの要求も、母親が子連れでも、一般の大人と同じ様に交通機関やレストランを利用したいという“普通に暮らせる事”の望みで、子育てのバリアフリー化を求める意見である。何とか母子に優しい社会を構築していけることを期待したい。

育児給付制度については、出産時に大量支給されるおむつ用のごみ袋に満足する反面、他市町村でのオムツ無料化をA市にも希望していた。また、育児給付金は少し足りないとの声もあったが、育児給付制度については概ね満足している様子であった。

表 1

| 項目 | カテゴリー | サブカテゴリー |
|---|-------------------------|----------------------|
| の親 過子 ごの しー 方日 | 子どもの成長とともに整う生活リズム (3) | 自分のことは後回し |
| | | 成長とともに生活リズムができる |
| | | 成長とともに家事ができる |
| 育児 に 対 す る 思 い | 想像を超える育児・家事の大変さ (2) | バタバタと余裕のない日々 |
| | | ギャン泣きにパスしたいほどの大変さ |
| | 育児・家事の協力に対する夫と親への感謝 (4) | 育児協力で頼りになる夫 |
| | | 育児の協力で頑張る夫 |
| | | 家事の協力も頑張る夫 |
| | | 親の育児協力で悩みはない |
| | 気分転換の外出準備に目いっぱい (3) | わかっていても繰り返すイライラ感 |
| | | 気分転換に外に出る |
| | | 出かけるまでがいっぱいいっぱい |
| | 相談できない孤立感 (2) | 育児について尽きない心配 |
| | | 相談相手がいない孤立感 |
| | 育児に張りが出るママ友の存在 (4) | 思いが通じる仲間づくり |
| | | ママ友は近づきやすい同月令、同世代 |
| | | 同感できる思いに頑張る力が出る |
| | | 誘ってくれて、仲間ができる |
| | 子どもの成長が育児のよろこび (2) | 成長していくわが子が可愛い |
| | | 子育てが楽しい |
| | 子育てをとおして成長していく自分 (2) | 子育てを通し適応力がつく |
| | | 子育ては辛さと楽しさの両極 |
| 要望 する 子 育 て 支 援 へ の 思 い | 実践的育児指導や情報の要望 (4) | 実習できる離乳食指導への希望 |
| | | 父親の育児学級の開催を希望 |
| | | 成長を確認し手助けできるアドバイスの希望 |
| | | 妊娠中に知りたいサークル情報 |
| | 公共施設設備・経済的支援への要望 (6) | 仕事開始の心配は延長保育の有無 |
| | | ハードル高いちょっと預けられる場所 |
| | | 抱っこで移動、身動きが取れない不便さ |
| | | 移動に手間取る不便さ |
| | | 子連れで出かけられる場所・イベントの不足 |
| | | 育児への経済的支援の希望 |

7. まとめ

乳児の母親が求める育児支援への思いは、その希望する内容から以下の9点にまとめられた。

1. 離乳初期に実践できる離乳食講習会を開催する。
2. 妊娠期に育児サークルや子育て支援・場所などの情報の発信
3. 育児期の父親への育児教室
4. 気軽に立ち寄り相談できる場所の確保
5. 育児支援の情報とその情報の検索方法を周知できる機会の確保
6. 健診等で子育て支援情報やファミリーサポートセンターなどの説明や登録の機会
7. 子どもを休ませる場所やおむつ交換・授乳のスペースの確保等、子育てのバリアフリー化
8. 子連れで行けるレストランや喫茶店や子連れでも参加できるイベントの開催
9. 育児給付制度の充実

この論文の一部は、平成29年12月16日、第37回日本看護科学会学術集会(仙台)で発表している。

参考・引用文献

- 1) 母と子二人きり時間の過ごし方 AERA with Baby: 46 (2) 朝日新聞出版 15-24 2016.
- 2) 原田正文 子育ての変貌と次世代育成支援—兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防 名古屋大学出版会 2007.
- 3) 名寄市子ども子育て支援事業計画 平成27年3月 名寄市ホームページ
<http://www.city.nayoro.lg.jp/section/kodomo/prkeql000000gsul-att/prkeql000000gt12.pdf> 2016.10.1 検索
- 4) 永田雅子編著 妊娠主産・子育てをめぐる心のケア ミネルヴァ書房 2016
- 5) 内閣府編集 少子化対策白書(平成29年版) 日経印刷株式会社
- 6) 井田あゆみ, 猪下光: 乳児を持つ母親の育児情報ニーズ—ソーシャルメディア上における発言の分析—ヒューマンケア研究学会誌6(1) 217-23 2014
- 7) 橋本廣子, 上平公子, 田島愛, 田中耕: 事故記入式質問紙を活用した育児支援の検討—乳児過程全戸訪問事業児のアンケート調査から— 岐阜医療科学大学紀要8 99-106 2014.
- 8) イクメンプロジェクト「イクメンの星」 厚生労働省雇用均等・児童家庭局(委託事業)
<https://ikumen-project.mhlw.go.jp/employee/star/list/> 2017.4.15 検索
- 9) ファザーリングジャパン <http://fathering.jp/> 2017.4.15 検索
- 10) 政府広報オンライン 暮らしに役立つ情報 <http://www.gov-online.go.jp/useful/article/201510/1.html#anc05>
2017.4.15 検索
- 11) 永谷智恵, 笹木葉子, 村田亜紀子: 母子保健相談員から見た現代家族の様相 北海道文教大学紀要36 93-102 2012